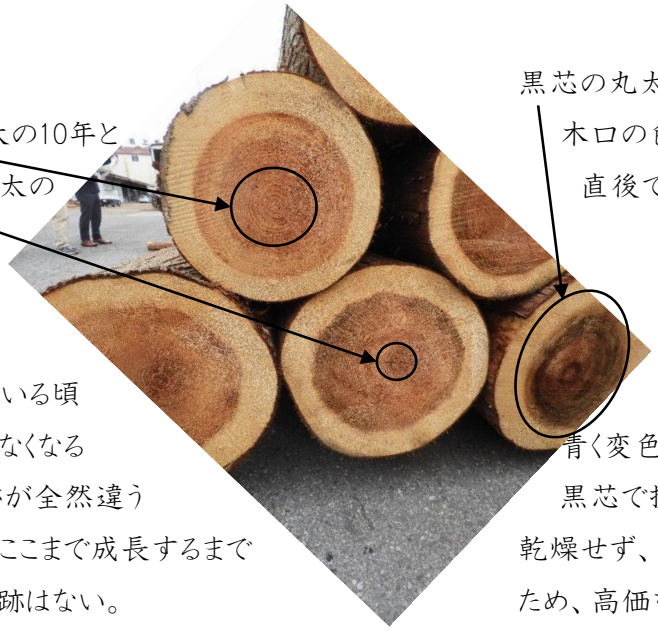
12月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　12月3日

今回の市についてはいつもと少し違った要素を持っている。
群馬県主催の”群馬県優良素材展示会”が併催されているのだ。
椪番号21号までは、展示会に出品され審査対象になっている物件だ。 審査規定に1件は 3.0㎥以上である事という規定がある為、皆 3.0㎥を少し超える材積しか積んでいない。
3.0㎥ を超えていれば、何かしらの瑕疵を持った丸太はできるだけ排除した物件にするためだ。
逆に”良い丸太だけでは3.0㎥に達しない”と言う場合もありこんな時は残った丸太から何とか”ましな物”を入れて審査に掛ける。 こう言った作業は主に市場の方で、優良素材展示会にふさわしい体裁にする為に、さんざん足したり引いたりして整えているのが現状である。

今回はこれと言って特に優れた材は見当たらなかった。 最優秀賞の物件も芯の部分の年輪が開いてしまっている丸太や黒芯の丸太が入っており、これも入れなければ審査してもらえなかった様で満点の最優秀賞ではなかったと思う。



芯が開いた丸太の10年と
芯が締まった丸太の
10年の太さ

10年位ではまだ
枝を沢山付けている頃
なので、節が出なくなる
部分の材の厚さが全然違う
いずれにしても、ここまで成長するまで
枝を処理した形跡はない。

黒芯の丸太
木口の色は通常の場合伐った
直後ではさほど黒くはない
樹液のアクが強いと
空気に触れ徐々に
酸化して黒くなる。
衣服に付いた草の汁が
青く変色するのと同じ現象である。
黒芯で挽いた製品はなかなか
乾燥せず、色も灰褐色になってしまう
ため、高価な製品は採れない。

これに対して椪番号 21号～57号 位までの物件は、審査対象の物件を作る際にはじかれた物や太物で長い物件が集まっている。 こちらは3.0㎥にこだわらなくて良いので、1本づつ若しくは少量で市に掛けられている。 丸太を1本づつ見て選べるので人気がある。 審査対象から漏れたとは言え展示会用に出荷された丸太なので、それなりの品質は有る。
こうして市に掛けるので椪数は多くなり、100を超えた。 それにしても今回はなんと不落札が多い事か。
177件中51件が不落札である。

売れた物は値を崩さずに売れているが、少し瑕疵がある物には法外なほど安い札が入っている様だ。
原木が足りない訳では無いらしい。 ただ今の時季の材は日持ちがするので、良い物は買って置きたいという事らしい。 落札価格を見れば、まだまだ高値は維持できそうだが、実際には良いもの以外は札の勢いは衰えが始まっている様だ。 落札予定価格が相場に先行する事は無い。
展示会に出ている材で応札が多数でも、物によっては不落札になっている場合もある様だ。

調査日　素材生産協同組合　12月8日

こちらの市も今回は”お歳暮市”と銘打って行なわれていた。 材積もそこそこの量が出ており
秋の需要シーズンが展開している。 出品された物は、ほぼ売り切れている。
この点は県森連より好調な様だ。

国有林材は中間土場で選別して、市場に出して良く売れる物を選んで出せるので実に効率良く
売り切っている。 その量たるや実に 580㎥ もの量がすべて平均的な相場で落札されている。
すべて平均的な相場と言う表現は判りずらいと思うが、つまり”何かしらの瑕疵があって安くなっている
物がない”という事である。 秋の需要期を最大限に活用しているのは国有林であろう。
とは言っても、中間土場、若しくは山土場である程度選別ができ、今売れる物だけを出荷出来る
懐の深さゆえんだ。

但し今回は民間材でも針葉樹に関しては完売している。 こちらは売れる物だけを出荷と言う
訳には行かないから、10,000円/㎥をわり込む様な物も入っているが、こちらも概ね平均的な相場
で全量落札である。 量にして 571㎥ である。 こちらも見事に秋の需要期の波に乗っている。

やはり現在の材木の価値とは、必要に応じて供給される量なのだろう。
もちろんそれは、安定した選別能力に裏付けされた量でなくてはならないが、安定した供給量を
維持する事は、それ自体が価値なのだ。

しかし森林を管理する森林組合の使命として、もうひとつ目を向けなければならない世界が有る。
間伐が追い付かずにどんどん大径木化し、間伐の対象になる山から置き去りになりつつある
山もあるという事。 そしてこれらをどう経営してゆくかと言う問題である。
行政の補助事業も置き去りになった山までは、なかなか手が回らないのが現状である。
ではこのまま大径木に育て、200年･300年の蓄積とすべし。 という事も言えるだろう。
秋田県の秋田杉は、災害を防ぐために”お留山”とした江戸時代の保安林が大径木となって
有名な秋田杉の基になった。 今では秋田産のスギはすべて秋田杉と呼んで良い事になっているが
50年ほど前は、100年生以上と言った制限があったように覚えている。

しかし これから大径木に育てる木を、現在の林業の姿で世に送り出せるだろうか。
群馬県の”優良素材展示会”が年々萎縮して行くのを見るにつけ、大径木の未来が見えない。
でも今の大径木は将来必ず貴重な銘木になる筈である。
今でも100年以上管理され続けてきた山を、いくつか知っている。 優良素材展示会とは別の
次元にある山で、そこには宝石のような木が今でも成長を続けている。

林業にたづさわる者として、樹種別の特性やその使い道など木材の素材としての価値を見る目を
養う事も必要なのではないだろうか。 今の林業の実務から見れば”エソラゴト”の様な理想かも
知れないが、10年を超えれば高級な洋酒などとくらべ、70年･80年或いは100年以上育てた木に
価値が無い訳がない。 使い方が判らないだけだと思う。